

日本語の再発見

付 論 小学校の漢文教育について

荒井教諭の唐詩指導記録とその感想

小学校一年生の唐詩の授業を視る

生にとっては、『唐詩選』の学習など無理がないどころか、実に魅力に
充ち満ちたものである事を理解して頂き、この実践を一人でも多くの先
生に取入れて頂きたい、と念願するものである。

「三月十三日(土)午後一時より、本校の荒井真弓教諭が一年生に対
して『唐詩選』の授業を公開するので来校してほしい」といふ案内状を、
千葉県船橋市立金杉台小学校平山寛司校長から頂戴した私は、喜んで訪問した。

荒井先生の記録(附・私の感想、原文は現代かなづかひ)

『唐詩選』を学習させてある幼稚園は、今は何園もあるが、小学校で
はまだ一例もない。初めての実践なので、何をおいても見せて貰はな
ければといふ気持ち、平山校長から、授業後講話してほしいといふ依
頼も受けてみたので、十二時前に訪問して、昼食を頂戴しながらこれま
での経過について伺った。

十二月十五日(火)四月から教へてある漢字カード一六二枚を、二、
三日前から一枚ずつ見せて復唱させてある。漢詩を教へたいのだが、
そのチャンスがないままに日が過ぎていく。いつ、どういふ方法で、子
供たちの前に出さうか。漢字カードの復唱を一日一回ずつ続けてみる
うちに、新しい漢字を教へてほしいと要求する声が高くなり、「早く新し
いのを」と言ふ。「今だ」とばかりに“静夜思”を模造紙に書いたのを掲
示する。

荒井先生は、以前私から幼稚園児の唐詩学習の話聴き、自分でも
一年生を担当して『唐詩選』を指導してみたいとの念を懐き、校長の許
可を得て十二月十五日からその指導を始めた、といふ事であった。

昔の中国の詩であること。漢字ばかりで書かれてあること。中
国で作られたものだから、日本文のやうに上から下へまっ直に読むと
は限らないこと、等を教へる。

さて、授業を拝見してみると、この時期の子供の一年間の成長は実
に目ざましいものがあるだけに、幼稚園児に比べて格段と違った落着
いた雰囲気があって、唐詩の授業が実に堂々と展開されて行き、私は
我を忘れて見入った次第である。

これに対する子供の反応は、「上に行ったり下に行ったりして戻って
読むからおもしろい」と言ふ。まづ第一関門は抜けたやうだ。非常に興
味をもってゐる。

授業に先立って頂戴した荒井先生の唐詩の指導記録が今ここにある
ので、それを紹介してこれに私の感想を加へ、幼稚園児や小学校一年

指で一字ずつ指示しながら、ゆっくりと範読する。読み方については、

全体を範読。起の部分の範読 一斉読み。承の部分の範読 一斉読み。転の部分の範読 一斉読み。結の部分の範読 一斉読み。起承の部分の範読 一斉読み。転結の部分の範読 一斉読み。全休の範読 一斉読み。これを繰り返して読む練習をする。最後に、“静夜思”の意味を教へて再び一斉読みを繰り返す。

(~ のやり方は、私が幼稚園でやってみるやり方と全く同じである。子供は大きな声で朗読する事が大好きであり、繰り返して読む事が大好きである。この“繰り返し”を“学習”と言ふのである。幼児は皆生れつき学習が好きだから、十分に学習させてやれば、いよいよ学習が好きになり、自然に能力が向上する)

十二月十六日(水)“静夜思”の詩を、私が指示棒で指し示しながら、一人ずつ読ませた。最初から読みたがった子 = 二十五人。さうでなかった子 = 十二人。全員が一人ずつ立って読んだが、皆独りで読めた。

(このように、一人ずつ全員に読ませる事は有益であり、実に重要な事である。自信のある子から順に読ませて行けば、自信のない子も次第に読む力がつき、自分の番が来る頃には独りで読めるやうになる。大人は反復が嫌ひだが、幸ひ子供は大好きである。能力の高い数人の子供だけに読ませて終るやうな学習は“学習”とは言へない。全員が読む位の反復練習は“学習”の最低限である)

十二月十七日(木)“静夜思”を一人ずつ前に出て、指示棒で漢字を指示させながら読ませる。三十四人の子がすらすらと読む。残りの三人は、私が棒で指示してやって読ませた。すらすらと読めた。

残りの二十分間で、次の“春暁”を教へる。範読の時、“聲”といふ字について、ある子が「僕の知ってゐる声といふ字は、この字の上の方だけだ」と言ふ。そこで、「学校の教科書で習ふ字は“声”だが、この字も“こゑ”と読む」と教へる。すると、「“聲”といふ字の方が、“耳”がついているから解りやすい。だって、声は耳で聞くものね」と言ふ。

(この子供の言ふ通り、“聲”の方が“声”よりも事実覚え易いのである。「字形が簡単な方が覚え易い」といふ考へは、誰もが考へ易い事であるが事実と反する。だから教育は頭だけで考へては失敗する。何よりも事実を重んじ、事実を基にして考へるのである。戦後の字体簡略化は、漢字の重要な記憶のための手懸りを取除いたため、逆に覚えにくくなった事を、この子供の言葉から汲み取ってほしい)

十二月十八日(金)“春暁”を一人ずつ、指示棒を持たせて読ませる。この日も三人にこちらで指示してやって読ませた、すらすらと読む。

(自信のない子に、強制して独りで読ませるはいけぬ。一層自

信を失ふからである。荒井先生の指導は子供に対する思ひやりに満ちてゐて、見学する私たちの心までがほのぼのとした暖かいものに包まれる。

特に自信のない子供に対しては、子供が読む間中、その子の手を握ってやってみた。かういふ暖い先生の気持が、自信のない子にもやる気を起させるのである。自信のない子は傷つき易い。大事にいたはり、長い時間をかけてあせらずに指導することが大切である)

十二月十九日(土)漢詩の学習が好きか嫌ひか、またその理由についてアンケートを取ってみる。

好き = 二十三人。理由……漢字を覚えると頭が良くなるから = 十人。むづかしい勉強だから = 八人。むづかしい漢字が覚えられるから = 五人。漢字が好きだから = 五人。おもしろいから = 一人。詩がおもしろいから = 一人。頭が良くなりお母さんにほめられるから = 一人。読みやすくすぐ覚えられるから = 一人。読めるようになったから = 一人。

嫌ひ = 四人。理由……漢字がにがて = 一人。漢字がむづかしい = 一人。漢字ばかりでおもしろくない = 一人。忘れたりするから = 一人。

“秋浦歌”を教へる。起句はすぐ覚えたが、承転結は言ひにくく覚えにくいやうである。この日に完全に読めるやうになった子はゐない。“静

夜思”と同じ李白の詩であることに気付く。

(このアンケートで、漢字の難しさが好きの原因にもなり嫌ひの原因にもなる事が解る。同じ風が、弱い火は消すが、強い火はいよいよ盛んにするやうなものである。

自信のない子は弱い火と同じである。消え易い火を消さないやうに努めると同時に、火勢を強める配慮が必要である。自信のない子を救ふ道は、結局、反復練習だけである)

十二月二十一日(月)“秋浦歌”の二日目。二十一人が完全に読んだ。つかへる子供は主に「以固長」と「不知」の所である。一斉読みを繰返してゐるうちに、時間の終る頃にはつかへてゐる子供も暗記して読めるやうになる。反復して唱へることが、読めるやうになる秘訣のやうである。

完全に読めてみた二十一人の子供に、丈・白髪・愁・秋霜を無差別に指し示し読ませたところ、ほとんど読めた。といふことは、子供たちは読み方を先に覚えて空で唱へてゐるのではなく、漢字をちゃんと覚えて読んでゐるのだ、といふことがわかる。

(荒井先生が「反復が成功の秘訣」と感じ取られた事は立派である。子供は反復が好きなのだから、反復はすればするほど上達するのだから、新しい知識を与へる事よりも反復させる事の方が大切だ、といふ

日本語の再発見
事を知るべきである)

付 論 小学校の漢文教育について

荒井教諭の唐詩指導記録とその感想

十二月二十二日(火)“鹿柴”を教へる。読み方を知っている漢字がたくさん出てくるので、どの位で読めるやうになるか実験をする。

どの字を知っているか言はせる。違ふ読み方をすることを言って、ゆっくりはっきり発音して範読する。

一斉読みを六回繰返した後で、一人で読みたいといふ子供を起立させる。十四人のうち九人が完全に読めてゐる。残り二十八人も大体読めるやうになってゐる。

今日初めてこの詩をやったが、一時間で大体読めるやうになったといふことは、すばらしい記憶力である。その原因は、見慣れてゐる漢字が多いからなのであうか。発音が簡単だからなのであうか。

十二月二十三日(水)“竹里館”を教へる。使用漢字は新しいものが多く、発音もむづかしい、といふ理由で、“鹿柴”と比較して記憶の難易の度合ひを調べてみたい。

起承の部分にむづかしい漢字が多いので、何回も繰返して読ませた。その結果、割合よく覚えた。むづかしい漢字とやさしい漢字と、覚えるのに差がない、といふ事が言へる。

一月八日(金)帰りの時間、十五分を使って今までに学習した五つの詩を一斉読みさせる。読み方が休み前よりしっかりしてゐる。読みこなす周期が解ってきたので、水・土に新しい詩を提出することに決める。

ふと「なぜ漢詩を教へてゐるのであうか」と考へてみた。石井先生によると、「漢字で教へると集中力や思考力がつく」とある。しかし私は、まだ身を以てそれを感じない。果して思考力がついてきてゐるだらうか。集中力についてもさうである。良い子もゐるがさうでない子もゐる。漢字で教へてゐるから良くなったのであうか。それとも漢字に関係なく、個々の生れつきなのであうか。

しかし、唯一つだけ手に取るやうに分かることは、漢字や漢詩の学習をしてゐる時間だけは、子供たちの個々のエネルギーが一つの大きな流れとなり塊となつてぎゅっとこちらを向いてきてゐる、といふ事である。圧迫される感じさへ持つことがある。

(おもしろい事は、「漢字学習は思考力や集中力を育てる」といふ私の言葉を信じて実践した荒井先生でも、「果してさうだらうか」と疑問をもった事である。しかし、漢字学習的時間だけは何か違ったものがある。圧迫される感じがする。これだけ感じられたらもう十分だと私は思ふ)

一月十一日(月)“夜送趙縱”を土曜日に教へ、今日は二日目。朝教

室に入ると、三人飛んで来て「読めるやうになったから一緒に見てほしい」と言ふ。三人とも正しく読めてみた。とても嬉しさうである。

わづか五分、十分の休み時間でも、漢詩の前に集って来る。順番に指示棒を持って読む。自分の番が終っても、他から非難されるまでは、何度でも繰返して読んでゐる。帰りまでには、更に二十人の子供が正しく読めるやうになってゐた。

(ツメテソは筆者がつけた。何度でもやらうといふ子供らしさ、意欲の強さがよく解る)

一月十三日(水)“平蕃曲”を読む。「渺々として」「茫々として」の対句に興味を示し、おもしろいと言ふ。しきりに意味を聞いたがる。

一月十八日(月)“洛陽訪袁拾遺不遇”を読む。新しい詩を読む時も帰りの時間を使つてゐるので、短い時間でもあり、子供たちは聞きもらすまいとしてゐるやうだ。

この頃、全体的に覚えるのが早くなってきてゐる。覚えるコツのやうなものを体得し始めてゐるのではないか。

一月十九日(火)今日、念のためGとNに読ませてみる。一昼夜たつてゐても忘れてはゐない。正確に読む。Yも正しく読めた。Y(普段の

成績はほとんどC)とG(ほとんどA)に同じ量づつ漢詩を与へていけば、どうなるだらう。今のところ、二人の覚える速度は、クラスの誰よりも早く正確である。

(漢詩を覚える能力や読む能力は、知能や学力よりも、漢詩を覚えようとする意欲や関心の深さに因ることが解る。その意欲や関心は、「漢詩が読めた」といふ過去の事実に基く「自分には漢詩が読める」といふ自信から湧き出るもののやうである。

だから、くどいやうだが、反復練習の大好きな幼児期に漢詩を与へ、「漢詩が読める」やうにしてやる事が必要なのである。さうすれば、知能や学力の如何にかかはらず、誰でも自信をもち、強い意欲と深い関心をもって新しい詩を覚えようと努力するに違ひない)

一月二十日(水)“汾上驚秋”を読む。

一月二十五日(月)“蜀道後期”を読む。ゆっくり、はっきり発音しながら五回範読する。私がした事はこれだけである。範読の前に、「上等の目と耳だけ出しておきなさい」と、集中する事を指示する。

読めるやうになる事は、もちろんすばらしい事であるが、そのために、子供たちが重荷に感ずるやうになる事は、極力避けたいと思ふ。

(弱い火は風に消えるが、強い火は風によって火勢を強める。進んで重荷を負ひたがる子供にしなければならないが、初めからそれを望むと失敗する。火勢を強めようとして風を送り過ぎると、弱い火は消えてしまふからである。

子供たちは唐詩を読むのが快いので唐詩を読むのであり、喜んで読むので“読める”力がつくのである。だがその“読める”力はまだ弱いから、読む事を重荷に感じさせてはならない)

少しずつ覚える速度が早くなり、新しい詩を練習する時の手間も少しずつ軽減してきてゐる。その理由には、友達同士で教へ合っている事がある。

早く覚えた子が、首をかしげてゐる子の側で、手とり足とり教へてゐるのである。よく見ると、教はる方がえらさうな態度で教はってゐて、教はる方に卑下した態度や自信喪失の様子が見られない。とても嬉しい。

読めるやうになると、小躍りしてやって来て「聞いてほしい」と言ふ。おかげで学級事務をする時間がまるでない。

「唐詩の学習で苦手に思ふ事、困る事があつたら書きなさい」といふアンケートに対して、「新しい詩を習った時に心配だ」といふのが十六人、「詩の意味は大体わかるが、どの字がどんな意味を持ってゐるのか詳しくわからない」といふのが九人あつた。

前者に対しては、先生だって新しい学習の時は心配なんだといふ事

を強調し、慣れるまでは先生や友達の読むのを一生懸命聞いておればよい、と話す。また、早く覚えなくてはいけないとあせる必要もない事を強調した。

後者に対しては、「秋の詩だ、友達と別れる詩だ、さみしさうだ、といふ事がわかればよい」と話す。「今わからなくても、大人になればわかる、それでよい」と言ふと、安心した顔をしてにっこりと笑ふ。しかし、詳しく知りたいと思った時には聞きに来るやうに、とつけ加へた。

一月二十九日(金) “聞雁”を読む。五回範読するのみ。この五回といふ回数は、根拠のあるものではない。少なすぎてもいけないし、多すぎても集中しなくなるだらうと考へてさうしただけである。

さやうならの後、H・G・K・N・Tが残って、五人で読む練習をしてゐる。側で学級事務をしてゐたが、よく飽きないものだと感じた。放っておくと、四時でも四時半までもやっけてゐる。

この子供たちだけではなく、全体的にとっても意欲的である。

二月二日(火)理科の時間のことである。濃い影と薄い影について、それらがどんな物で出来るか、といふことで、濃い影は、手袋・ノート・消しゴム・本などで出来る。薄い影は、ナイロン袋、透きとほった物指しなどで出来る。……

ここまで確認し終った時、「子が「薄い影が出来る物をひとまとめにした言葉で言へる」と発言。「とうめいです」と答へた。そこで、“透明”と板書し、濃い影の出来る方を“不透明”と板書した。

その時、「その字何と読むか知ってあるよ。漢詩に出て来たよ」とHが発言。すると、たちまち三十人が目を抑かせて挙手する。指名すると、「ズトウメイ」と言ふ。二十九人がさうで、三人が「違ふ」と言ふ。

指名すると、黒板の前に出て読みたいと言ふ。そして、横書きしてある“不透明”を縦書きに直してほしい、と言ふ。そこで、縦書きにすると、その子は指示棒を持ち、「トウメイにあらず」と読み出した。残る二人も同じである。

私は嬉しいやらをかしいやらで大笑い。「ズトウメイ」も「トウメイにあらず」も間違ひではないが、この場合は「フトウメイ」と読むことを教へ、「安心 不安」等の例を使って、“不”の意味や使ひ方を理解させる。おかげで時間の半分を使ってしまった。

(荒井先生は、理科の時間に漢字の学習をその時間の半分もかけてした事を、やり過ぎと反省してあるやうだが、用語の学習は基礎中の基礎である。十分に理解させることが大切で、そのために時間を惜しんではいけないのである。

わが国では一般に、理科や算数や社会科用語を“かな表記”で間に合せ、漢字表記は国語科に任せてある。アメリカでは一年生

から理科や社会科があるが、その用語の読み書きはそれぞれの教科学習の重要な学習としてある。それがその教科学習の重要な内容だからである。

四年生まで理科や社会科のないドイツでは、あらゆる教科学習の基礎である用語の読み書きを、わが国の二倍もの国語学習の時間をあて、学習させてある。読み書き能力の弱い者に理科や社会科学学習をさせても無駄だ、といふ考へ方である)

二月三日(水)“独坐敬亭山”を読む。

二月六日(土)“易水送別”を読む。

二月十日(水)“南樓望”を読む。今日は新しい詩を読む日だといふ事で、朝から「今日は新しいのだよね」と入れ替り立ち替り聞きに来る。

二月十三日(土)“臨高台”を読む。

休み時間になると、私の漢詩の本(石井教育研究会編)を貸してほしい、と言ってくる事が多くなった。五、六人ひとかたまりになって声をそろへて読んである。もう半分位読めるやうになった。

まだ読み方を知らない漢詩については、「この字は知ってある」とか、

日本語の再発見

付 論 小学校の漢文教育について

荒井教諭の唐詩指導記録とその感想

「これは前にどこそで出てきたよ」とか話し合っている。そのうちに、私の所へ持って来て、新しい詩を指さし、読んでほしいとせがむのである。

大きな声でゆっくり読んでやると、また本の引っぱりあひになり、聞きかじりで読む。本を作って与えてやろうかと思ふ。

二月十七日(水) “送朱大入秦”を読む。

漢詩を指示して読むのが苦手といふ子が四人あだが、いつの間にか漢字を指示しながら読むようになってゐるのに気付く。かうして全員の子供が漢字を指示して読んでゐるからこそ、新しい詩でも「あの字は前にかう読んだ」といふ確認ができ、余り抵抗なく入っていけるのであらう。

二月十九日(金)

今日、Hのお母さんが言った。「先生、漢詩を教はってゐるせみかどうかは分からないけれど、この頃物事をしつこい程追求するやうになりました」と。それは私にも分からないが、とにかく嬉しい事だと思った。

二月二十日(土) “関山月”を読む。範読は勿論、詩の意味を話してゐる時、ずっと耳を傾けて聞いてゐる。経験背景は少ないだらうが、それ

なりに映像化してゐるやうだ。時々口から洩れるつぶやきにそれが表れてゐる。

「夜、笛の音が聞えてくるってさびしいんだね」「僕は月が出てゐると思ふな。だって雁の飛んでいくのが見えたんだから」「そこには山はないの」「私は広い所だと思ふな。だってスーホのお話の絵広かったよ」幼い映像でもよい。読んで何かを感じてくれれば、漢字で詩を教へてゐる成果の一面が出てきたといふものだ。それにしても子供の頭は実にやはらかい。まるで海綿が水を吸ひ込むやうに新しい知識を吸ひ込んでいく。(要約した所がある事を、荒井教諭並びに読者にお詫び申し上げます)